祈りの言葉

本日、ここに、令和五年度　水俣病犠牲者慰霊式にあたり、祈りの言葉を申し上げます。

患者連盟の初代川本輝夫委員長の後継として活動して参りました　父、松﨑忠男が昨年八月に亡くなり、後を追うように半年後の今年二月、母が亡くなりました。

両親共に認定患者であり、今回の「祈りの言葉」を申し述べる機会を与えて頂きましたのも、水俣市　髙岡市長をはじめ、実行委員会の皆様の御配慮によるものと、心から感謝申し上げます。

私たちが小さい頃は、近所の誰もがそうであったように、小学三年生頃から、両親と共に船に乗り、漁の手伝いをしておりました。厳しい父の躾に、手伝いが嫌になったこともあります。それでも「大きくなったら、父の跡を継いで漁師になるんだ」と、子供心に思っていたものでした。

何年か後に、父がポツリと「このままでは、漁師じゃ飯は食えんバイ」と言ったのを覚えています。当時はまだ、父の言葉の意味が理解できないでいましたが、漁師になる

夢を捨て、職人を目指すと心に決めたのも、父のあの一言だったように思います。

私は昭和五十三年に芦北町消防団に入団し、昨年三月に退団致しました。入団した頃、すでに両親は認定されており、団活動を続けていく中で、団員同士、水俣病の話題が出てきても、すぐ互いに口をつぐんで話が途切れる、といったふうに、当時はまだ差別意識が残っていたように思いますが、現在は当時と違って、そういう事も少なくなってきたと思っています。それも、故 川本初代委員長をはじめ、多くの関係者の方々の御努力の賜物と感謝申し上げる次第です。

平成十六年、父が「祈りの言葉」の中で「この地に立ち昔を偲び　見渡せば　どこへ消えたか　水俣の海」と申し上げました。

また、「水俣病で、もっとも可哀想なのは、胎児性患者だ」と。

「水銀に汚染され亡くなった、多くの子供たちもいます。人間の能力の多くを奪われて生まれてきた子供たちは、今でも想像を絶する苦労を続けています。彼らの人生を奪っ

たのは、いったい誰なのでしょうか・・・。」とも話しておりました。

令和二年から急激に感染拡大した新型コロナも、行政をはじめ、多くの関係者の皆様の御努力により、収束の兆しが見えつつありますが、水俣病問題の収束は、まだ遠いように感じられます。

私も父同様、女島生まれの、女島育ちです。水俣病被害者手帳を持ち、健康には人一倍気を使っています。

水俣病問題に取り組んできた両親が残した足跡を大事にし、今後もこの地で生活していきます。私達も、一人ひとりがもっと真剣に考え、知恵を出し合い、これまでのような悲劇が二度と起こらないよう努めて参ります。

最後になりましたが、本日、慰霊式を開催して頂きました、水俣市をはじめ、実行委員会の皆様、多くの関係者の皆様に感謝申し上げますと共に、犠牲者の皆様の御冥福を心から願いまして「祈りの言葉」と致します。

令和五年五月一日

患者・遺族代表　松﨑　政司